

明治前期の実業家藤島常興関連資料について

佐藤 嘉孝

Collected writings about early Meiji businessman, Tsuneoki Fujishima

Yoshitaka SATOU

山口県立山口博物館研究報告

第39号(2013年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No. 39 (March 2013)

明治前期の実業家藤島常興関連資料について

佐藤 嘉孝¹⁾

Collected writings about early Meiji businessman, Tsuneoki Fujishima

Yoshitaka SATOU

1 はじめに

現在山口県では、明治維新150周年を迎える2018年に向けて、各種イベントが計画進行中である。この節目の年を迎えるにあたって、「明治維新」とはいったい何であったのか、その後の日本の進む道にどのような影響を与えたのかという点について、再評価が求められている時期ではないだろうか。その回答を求める手がかりとして、最近の県内博物館等の展示や催し物では、明治維新以降日本近代化の一翼をになった、山口県出身の実業家にスポットライトをあてたものがみられるようになった。また県内の各資料所蔵施設の中には、地元出身の近代実業家を顕彰する展示を設けている所が見られる。これまでどうしても幕末の志士や、明治以降の政治家及び官僚に比重

表1 地元出身の近代実業家を紹介している施設

施設名	取り上げている人物
岩国学校教育資料館	藤岡市助
防府青少年科学館（ソラール）	柏木幸助
山陽小野田市歴史民俗資料館	笠井順八
下関市立豊北町歴史民俗資料館	中山太一
下関市立豊浦小学校教育資料館	瀧川辨三

表2 山口県出身の近代実業家を取り扱った展覧会・催し物一覧（2011年以降）

名称	開催施設	期間	関連する人物
(時刻表の父) 手塚猛昌顕彰展	萩市立須佐図書館	2011/10/5～10/16	手塚猛昌
中山太一と郷土 大正モダニズムと地域教育	下関市立豊北町 歴史民俗資料館	2011/11/17～ 2012/3/31	中山太一
日本の近代を拓いた萩の産業人脈 —藤田伝三郎とその時代—	萩博物館	2011/12/1～ 2012/4/10	藤田伝三郎 久原房之助 鮎川義助 田村市郎
先人の遺業 宇部の精神 シンポジウム「渡辺祐策からのバトン ～幕末から そして現代へ」	宇部市渡辺翁記念会館	2012/1/21	渡辺祐策
周南の近代を彩った人たち 周南人物列伝1 産業・経済編	周南市美術博物館	2012/9/21～9/30	浅田義一郎

1) 山口県立山口博物館（考古）

を置いた展覧会や研究が多かったが、このような動きによってそれだけではわからない歴史の側面が見えてくるのではないだろうか。

本稿では、幕末維新时期から明治前期に活躍した山口県出身実業家の一つのモデルとして、長府藩出身の藤島常興をとりあげる。彼の業績は、1997（平成9）年に国立科学博物館「ハイテクにつぼん誕生展 明治の近代化遺産」と題した展覧会の中で、紹介されたことがある。彼の明治前期の足跡は、長州出身の実業家がたどった典型として、注目すべき点が多い。その業績を整理し、産業発展史の中に位置づけることによって、前掲の目的を達成する一助になるのではないかと考える。本稿はまずその準備段階として、その郷里下関市長府を中心に、彼の関連資料をまとめることを目的とする。

2 藤島常興の足跡

藤島常興の郷里下関市長府にある下関市立長府博物館（以下、長博と記す）には、彼に関わる資料がいくつか残されている。それらの中に、彼の自筆による「藤島家略伝・藤島常興履歴書」及び「藤島家略伝 附常興履歴」と題する資料がある。前者は藤島の東京在住時代の1885（明治18）年、後者は長府に帰郷した1891（明治24）年以降に書かれたものである。その内容はたぶん自己申告的要素を含み、取り扱いには注意を要するが、主要な部分は史実と一致するので、ある程度の参考になると考える。本論に入る前にこの資料の記述にしたがい、藤島常興の足跡について簡単に整理しておこう。

1829（文政12）年、長府藩のお抱え金工師の家に生まれた藤島常興は、幼少期に狩野芳崖の父晴阜に学んだ。狩野芳崖は代表作「悲母観音像」で知られる、明治前期の日本を代表する画家である。彼は藤島常興より一つ年上の幼なじみで、後述するように、生涯にわたって深い交流があったことが知られている。1856（安政3）年に江戸へ出た常興は、装剣金工師後藤一乗のもとで刀剣彫刻を学ぶ一方、日本に西洋砲術を普及させたことで知られる、江川太郎左衛門より蘭式練兵を学んだ。当時の常興は、開国から幕末に向かう時代趨勢の中で、西洋の最新式軍事技術に高い関心を持つようになっていた。その後も佐賀・長崎にわたり、砲術家高島秋帆の塾に入って蘭書を学ぶかわら、西洋式の鑄造・鍛造技術を研究する。長府に帰郷した後は、長府藩の兵術家河崎董の門下に入り、地雷・水雷について学びながら、武器の材料となる長門国内鉾山の銅鉄等の実地分析も行っていた。

1866（慶応2）年、38才となった常興は、家業の金工師を廃して武家格となる。この頃には幕府と長州藩の間で緊張が高まり、常興も修得した知識・技術をもって藩に貢献することが求められた。汽船・軍艦の実地運用、陸地砲台事務に加えて、大砲小銃の製造にも関わった。一方で測量術に関心を持つようになり、その修得に励むようになっていた。明治に入ると、修得した測量技術を生かし、長門国豊浦郡の測量を任せられる。その過程で測量機器が不備であると感じ、かつての家業を応用して機器の改良に取り組んだ。以後、常興は測量機器の製作によ



写真1 藤島常興肖像写真
（下関市立長府博物館蔵）

て、明治新国家の近代化に貢献しようと考えようになった。

1872(明治5)年、官命により息子常明ともども工部省に奉職することになると、当時の明治政府による測量機器の国産化政策に自らの活路を見出し、精力的に活動するようになる。まず明治政府が初めて参加したウィーン万国博覧会に随行し、自身が製作した測量機器を出品、有功賞牌を獲得する。そのまま技術伝習生としてオーストリアにとどまった常興は、最新式の測量機器製作について学んだ。帰国後しばらくは工部省に勤務していたが、1876(明治9)年の官制改革で工学寮の測量機器製作が廃止になると、身の置き所を失い、工部省を退官する。

官を辞した後の1878(明治11)年には、息子常明を主任として測量器械及び実験用の理学器械を製作する製作所を立ち上げる。測量器械は主に陸海軍向け、理学器械は小中学校向けに製造された。当時の常興には、特に海軍からの測量機器発注が拡大するとの胸算用があったらしく、積極的に資金繰り及び設備投資に励んだ。ところが、機器を海軍内部で自作して賄うこととなり、その発注増大の望みが絶たれると、製作所が財政的危機に陥る。東京府知事や勝海舟等に資金援助を求めているが、好転しなかったようである。その心労のためであろうか、長男常明が病気で亡くなると、今度は器械製作所を藤島製器学校と改称し、同校の校長となる。民間初の職人養成機関として注目すべき存在であったが、この学校も4年足らずで閉校になったといわれている。以後彼は、古貨幣の調査と模造に情熱を注ぐこととなった。一方でかつての家業である金工を生業としていたようである。1891(明治24)年、63才になった常興は長府へ帰郷し、郷里において悠々自適の老後を過ごしていたが、1898(明治31)年に70才で病没する。

以上、藤島常興の足跡を、後述する内容と関連が深い事項を中心に、簡単に振り返ってみた。次章以降では、藤島常興の生涯を第Ⅰ期「長府・遊学時代(1829～1871年)」及び「明治政府出仕時代(1872～1877年)」、第Ⅱ期「東京での実業家時代(1878～1890年)」、第Ⅲ期「長府帰郷以後(1891～1898年)」の三つの時期に分け、それぞれの時代に関連する資料を紹介していく。なお、どの時期にも当てはめにくい関連資料については「その他」とし、第Ⅲ期の章内で合わせて紹介する。それによって、藤島常興の自伝と資料に残された痕跡との照合をはかりたいと思うが、主に長博元館長椿惣一氏による「藤島常興氏を語る(一)～(四)」(新聞連載)と中川保雄氏の「藤島常興:封建時代の伝統的職人と明治初期工業化政策との結びつき(Ⅰ)・(Ⅱ)」(『科学史研究18号131・132』)の記述を参考とする。そして最後にその内容を踏まえて、今後の藤島常興研究への展望に触れ、近代における山口県出身の実業家を研究する意義について私見を述べたい。

3 第Ⅰ期「長府・遊学時代(1829～1871年)」及び「明治政府出仕時代(1872～1877年)」

藤島常興の出生から48才に至るまでの、人生の大半を占める時期であるが、残念ながらこの頃の資料は現在の所あまり見つかっていない。その中でも注目されるのが、1864(元治元年)年に米・英・仏・蘭の四カ国が下関を砲撃した事件の様子を描いた長博蔵の「馬関戦争絵図」である。この戦争は、関門海峡を通過する外国船に対し、長州藩が一方的に砲撃したことに始まる。その報復措置として、前述の四カ国が下関を砲撃し、長州藩は壊滅的な打撃を受ける。それまで攘夷論を高く掲げていた長州藩は、欧米諸国との軍事力の格差を思い知り、以後大きく政策を変更することとなった。縦約1m×横約4mにも及ぶ大作で、いわゆる「馬関戦争」の

様子を後年に伝える貴重な資料としても有名である。常興は前述のごとく、幼少期に狩野芳崖の父晴皐より絵を学んでおり、大変絵が堪能であった。この絵は当時の激戦の様子を、歴戦者の話をもとに描いたと伝えられる。現場を直接目にしたかどうかは定かではないが、開戦当時常興自身は長府に帰郷していた。この絵で注目すべき



写真2 馬関戦争絵図（下関市立長府博物館蔵）

点は、椿氏も指摘していることであるが、甲冑をつけた一人の若者が台場の砲台の先で両手を広げて突っ立っているシーンである。欧米四カ国の圧倒的な軍事力に翻弄されながらも、負けてたまるかの心意気を感じられる。後年、欧米諸国からの輸入品に取って代わる機器を製造することに腐心した、技術者常興の原点が見られ大変興味深い。製作時期は不明であるが、戦争当時よりそれより遠くない時期ではないだろうか。

「馬関戦争」後、武家格になった常興は、大砲小銃の製造にも関わったと自伝で述べているが、その証拠となる資料が「砲弾略図」である。略図の右隅には「心遠斉写」と書かれた署名と落款が見られるが、心遠斉は藤島常興の雅号である。これは長博及び山口博物館に全く同じ略図がそれぞれ一枚ずつ存在するが、山口博物館にある方の略図は「安尾家文書」と題せんがつけられ巻装されている。安尾氏は、戦国時代から大正時代に至るまで、長府において鋳物業を家業としていた。恐らく長府藩の命を受けた常興が砲弾の設計図を描き、それを元に鋳物師安尾氏が砲弾を製作したと考えられる。ちなみに、この設計図を元に製作されたと思われる砲弾の実物は、長博に残されている。

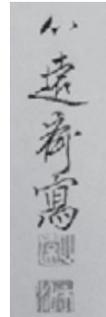
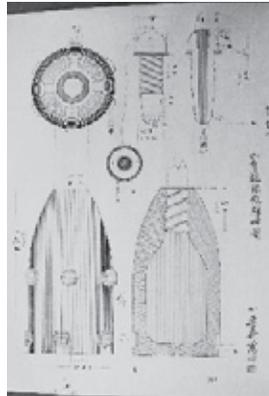


写真4 「心遠斉写」の文字

写真3 砲弾略図（山口県立山口博物館蔵）

明治時代に入り、長男常明とともに上京し新政府の工部省に奉職することとなった常興は、1873（明治6）年にオーストリアのウィーンで行われた第六回万国博覧会に随行を命じられる。当時の様子は、『澳国博覧会賛同紀要』（田中芳男、平山成信編）で概略を知ることができる。日本にとって初めての万国博覧会進出であったが、同展覧会に常興は自らが製作した測量器械を出品し、有功賞牌を得ている。その際に受領した賞状は、現在長博の所蔵となっている。この後常興は技術伝習生と



写真5 ウィーン万国博覧会賞状（下関市立長府博物館蔵）

して、測量器械製造法を習得することを命じられ、約半年間ウィーンにとどまる。当時すでに45歳になっていたにもかかわらず、新たな技術習得と帰国後の技術伝授を期待されていた様子もうかがえる。明治政府と常興の関係が、最も良好だった時代である。

1877(明治10)年諸事情により、官職を辞した常興であったが、その年に行われた第一回内国勸業博覧会では、再び彼の名声は鳴り響くこととなる。同展覧会の審査官に任命されるとともに、彼が出品した「尺度画線機」が龍紋賞牌を賜ることとなったのだ。「尺度画線機」とは物差に代表される測量機器の目盛を正確に刻むための機器である。中川氏の評価によれば、この機器が製作されたことにより、高度な技術を必要とせず、均質な尺度を大量に刻むことが可能となった。すなわち、統一国家に必要な不可欠な統一された尺度を広く普及させたという点で、大きな意義を持つ。なお、同博覧会の表彰に関わる証状類も、現在は長博の所蔵となっている。

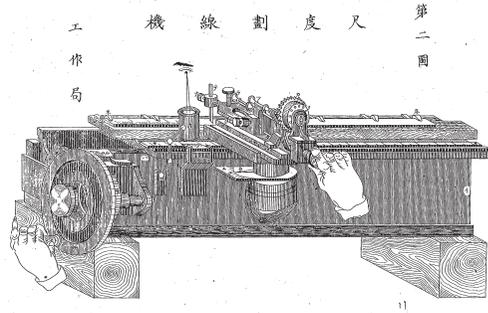


写真6 尺度画線機
(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

4 第二期「東京での実業家時代(1878～1890年)」

官職を辞した常興は、新しく測量器械及び理学器械の製作所を開設した。前述のように測量器械は陸海軍仕様として、セキスタント(六分儀)・セオドライト(経緯儀)・トランシットなどを製作した。また、理学器械は小中学校に納入された。製作所開設後も彼の持つ技術への評価は変わることなく、1881(明治14)年に開催された第二回内国勸業博覧会では、再び審査官として招致される。さらに同展覧会では、常興自身が出品した測量器及び理学器械が一等有功賞を、息子常明が出品した経緯儀が二等進歩賞をそれぞれ賜っている。

常興が製作した物理学実験機器の一つが、京都大学総合博物館に現存している。地磁気の伏角を測定するためのもので、「伏角計」と呼ばれる。1882(明治15)年12月「古光堂藤島製造」と刻まれているが、「古光堂」は藤島常興が製作所の名称として用いたものである。1883(明治16)年、大阪英語学校の時代に購入された。この機器は『近代日本と物理実験機器 京都大学所蔵 明治・大正期物理実験機器』(永平幸雄・川合葉子 京都大学学術出版会)内で、「当時の日本で最高水準の機器製作技術が駆使された製品である」と評価されている。そのことを裏付けるように、当時の日本製機器の中では最高額の90円で購入されている。

測量器械の海軍への大量納入の道がたたれ、同時期に共同経営者かつ優秀な技術者であった長男常明を失った常興



写真7 伏角計
『近代日本と物理実験機器 京都大学所蔵 明治・大正期物理実験機器』(京都大学学術出版会)より転載 不可三頼子氏撮影
(京都大学総合博物館蔵)

は、再び人生の岐路に立たされる。そして彼は、測量及び理学機器の製作所を改組し、技術者養成のための職業訓練学校を創設した。中川氏によれば、技術者養成をこれまでの徒弟制度的な方法によるのではなく、体系的で計画的な教育を試みた点で、先駆的な学校であった。そのことは藤島製器学校の学校規則・学科課程表・教科器械表と、それについての中川氏の検討によって明らかであろう。ただこの学校の本当の設置目的は、資金難という状況にありつつも、急増する物理学実験器械の注文へ対応するための緊急措置だったといわれている。近代的な器械製作技術者の育成という表向きの目的の一方で、実際には実験器械製造のための職人確保という側面もあった。したがって生徒には学科修得が課せられるとともに、器械製作に対する日給が支払われることとなっていた。常興の苦勞の程がうかがえるが、この学校も教育博物館斡旋の物理学器械の製造が激減すると、四年で閉校したようである。

製器学校を運営する一方で、この時期の常興は技術史に残る仕事を行っている。それは「日本尺原器」及びそれに附属する「メートルと曲尺（尺）との比較尺」、「衡原器模型」などの製作である。前章でも述べたように、明治新政府にとって度量衡の正確な基準を定めることは急務であった。当時、世界のメートル条約に加盟するにあたって、しっかりと「原器」が必要とされた。そこで白羽の矢が立ったのが、正確な測量器械の製作で定評のある、藤島常興であった。この内「日本尺原器」は、椿氏によると、真鍮製で0℃の状況下でぴったり「一尺」を長さになるという、これまでの尺度と比較して格段の精度を誇るものである。また、直接確認できてはいないが、「比較尺」はメートルと尺度の長さを比較するためのもので、「衡原器模型」は一貫匁の重さの基準を示す「原器」であろうと想像される。いずれも製作者として、「藤島常興」の名が刻まれている。正確な測量機器を製作することにかけて、当時の常興は明治政府より唯一無二の存在と認識されていたことを示す資料である。これらはかつて通産省工業技術院の計量研究所に保管されていたが、1974（昭和49）年に日本産業技術史上大変貴重な資料として、いずれも国立科学博物館の所蔵となっている（「国立科学博物館ニュース 1974 11」）。

学校設立後も、常興は「藤島製器学校」及び「古光堂」名義で事業を継続していたものと思われる。その頃彼が熱心に取り組んだのが、古貨幣の調査と模造である。この時代以降の常興について、中川氏は「それまで彼が全力を注いできた近代的器械製作分野のものではなく、（中略）以後の藤島の活動は彼の挫折感を反映していた」と評価している。しかし、その成果として作られた「日本歴代古金銀貨幣模造鑑」及び「日本各邦古金銀貨幣模造鑑」は、当時の宮内省に上納されている。さらに同様のものと思われる「複製貨幣」は当時の帝室博物館に買い上げられていることを考えると、貨幣博物学の分野における資料価値は決して低いものではない。ちなみに宮内省に上納された各模造鑑は、現在も宮内庁三の丸尚蔵館で大切に保管され、昨年7月21日～9月2日に開催された「珍品ものがたり」展で出品されている。さらに、帝室博物館が買い上げた複製貨幣は、そのまま現在の東京国立博物館で保管されている。以上の国を代表する資料所蔵施設で保管され、かつ展示に供されていることを考えると、これらの資料的価値についてはやはり再検討の余地があると考えられる。内容はかなり異なるが、山口博物館にも



写真8 日本尺原器（国立科学博物館蔵）

「大日本古金銀貨幣模造鑑」と名付けられたものと、それに付属するもの合計39箱が、現在も保管されている。古い記録をみると、1922（大正11）年に当時の長府毛利家から、寄託を受けたものであることがわかる。

これとは別に常興は、「日本古金銀貨大全一目表」及び「日本古金銀表目」、「日本歴代古金銀貨々名録」と題した書籍及び一覧表を出版している。これらの模造貨幣及び出版物は、彼自身の言葉を借りるなら、「本邦人の参考に供し」、「我邦の淳風を海外に示さんと」情熱を注ぎ、六年の歳月を経て完成させた成果である。ちなみに1890（明治23）年に行われた第三回内国勸業博覧会では、またもや審査官に任命されるとともに、複製貨幣一式を出品し、有功二等賞を獲得している。残念ながら今回はそれぞれの資料について比較検討することはできないが、いずれ稿を改めて報告したいと考えている。

最後に付け加えておくと、彼は皇居造営に際してそれに関わる御金物（詳細は不明）の図面を進上し、ついでその製作も命じられている。彼が事業に失敗しても、技術者としての評価は、依然最高水準にあったことがわかる。



写真9 第三回内国勸業博覧会褒賞証状
（下関市立長府博物館蔵）

5 第三期「長府帰郷以後（1891～1898年）」及び「その他」

1891（明治24）年、藤島常興は次男常之に藤島製器学校を任せると、彼は郷里の下関長府に帰郷する。あくまで彼の自伝内の記述によるのだから、この当時まで「藤島製器学校」の名前は残っていたようである。長府帰郷後の常興は、物理・化学・測量・其他諸器械の製造及び修繕を生業として行い、また諸種の金工細工の注文にも応じながら悠々自適の老後を過ごしていたようである。長府において特に親交の深かった許田其峯の家には、恐らくその頃の作と思われる細工品等が伝わり、その内いくつかは現在長博の所蔵となっている（「表3 藤島常興関連資料所在目録」参考）。許田は長府藩のお抱え医師の家系で、其峯（杏平）は医者及び俳人として知られる。

同じく長博所蔵の資料で、常興の仕事場に掲げられていたといわれている看板がある。「電気燈製造開業」と彫り込まれたこの木製看板は、恐らく長府において使用されたものと想像される。さらに長博に残る許田其峯宛の書簡によると、足通に悩んだ常興はエレキテルの模造に着手しようとしていたことがわかる。また、椿氏によれば、彼は第三回内国勸業博覧会で、「蜂の巣燈」とい



写真10 藤島常興作業所看板
（下関市立長府博物館蔵）

われる電灯を考案し、正門にこれを高く掲げたという。大きな蜂の巣の房に、一つ一つ電灯をつけたその形は、今日の鈴蘭灯に通じるものであったようだ。このように、晩年においても彼の進取の気性はやみがたく、明治20年代半ばにおいてまだ十分に普及されない、電気燈及び電気製品の製造を行っていたことがうかがえる。

常興が絵にも堪能であったことはすでに触れた。椿氏によると、彼の絵画はあまりにも出来が良かったため、親交が深かった狩野芳崖の落款をつけて、売りに出されたこともあったようだ。長博には彼の作品であると伝わっている絵画が、前出の「馬関戦争絵図」を含めて4点ある（「表3 藤島常興関連資料所在目録」参照）。その内一点が、彼の晩年の思いを表現していて興味深いので紹介する。なお、この絵については、下関市立美術館発行の「潮流」No.106の中で、同館学芸員の関根香織氏が評述されている内容を参考とした。「戯画天狗図」とでも題すべきこの絵は、常興の亡くなる前年に書かれたという。空をかける天狗と、それをうらやましげに見つめる狗を配した特異な構図も興味深い点であるが、その下部の左右にそれぞれ珍しいものが添付されている。左はウィーン万国博覧会の渡航者による親睦会の案内状で、右はそれが届いたことを証明する宛名の部分である。天狗が持っている手紙は、常興による案内状の返事と思われる。関根氏によると、常興はこの親睦会に出席できない状況にあったようである。他のウィーン万国博覧会渡航者が、天かける天狗のように華々しく自由に活躍している状況と比較して、帰郷後ひっそりと生活する自分を翼のない「狗」に見立て、寂しさを表現しているようにも思われる。その後間もなく、彼は病気のため、この世を去ることになる。

最後に本編で触れることのできなかった、彼に関連する資料について述べてみたい。常興と狩野芳崖の交流については先にも述べたが、その親密さを示す資料が2点残されている。その一つが、幕末期に狩野芳崖が描いたと思われる絵馬である。「予譲裂衣図」と題するその作品は、1885（明治18）年8月15日、藤島常興によって下関市の住吉神社へ奉納された。椿氏によれば、芳崖は常興らの勧めによって上京し、その後も常興より生活の扶助も受けていた。絵馬の奉納時期は、ようやく芳崖の画名が高くなった頃である。この絵馬は1994（平成6）年、他の芳崖作の絵馬5点とともに山口県指定文化財となり、現在も住吉神社が所蔵している。もう一点は狩野芳崖の手による「藤島検校肖像画」である。藤島検校は藤島常興の兄にして絃の名手であったと伝えられる。常興の親族の肖像を手がけるといことは、やはりその親交の深さを示すものであろう。椿氏によれば、常興自身も音楽にかなり秀でていたといわれ、鼓・能狂言・琴三味線・義太夫・舞など、



写真11 戯画天狗図
（下関市立長府博物館蔵）



写真12 藤島検校肖像画
（下関市立美術館蔵）

全て人に教えるほど上手であった。その他にも書に巧みで、和歌や俳句を作り、茶・華道もたしなむなど、実に多芸多才であったと伝えられている。

また、長府の豊浦小学校教育資料館にも面白い資料が二種類残されている。一つは、大判をかたどって製作し、「黄金臺模造」と名付けられた茶托で、5個で1セットとなっている。1888（明治21）年古光堂製と書かれており、ちょうど常興が古金銀貨幣の模造に情熱を注いでいた頃である。前述のごとく、当時は測量器械・理化学機械の需用が頭打ちと



写真13 黄金臺模造（茶托）
（下関市立豊浦小学校教育資料館蔵）

なっていた。「専売特許出願中」の印が確認でき、商品化を志向していたのかもしれない。もう一つは、江戸時代に軍資金として使用された、黄金大分銅の模型である。藤島常興の作であるとの証拠はないが、恐らく彼の手によるものであろうといわれている。この黄金大分銅は幕府の非常用軍資金としての役割を持っていたが、全て幕末期までに消費され、明治時代には現存していなかったとされている。そういうものを模型にして残していこうという彼の意思が感じられ、興味深い。

常興の天才ゆえの奇行ぶりを示す写真が、現在も長博に残されている。還暦を迎えた常興が、後ろ向きの姿をあえて撮影させたもので、写真裏には「明治二十二年六月ヨリ／向不見 藤島常興／三十年六カ月」と書き込まれている。椿氏はこれを、「六十一才とはいうものの、半分は寝て過ごしたのだから正に三十年六カ月である。この先何年生きのびるか知らないが、三十才の壮年であってみれば『向不見』の蛮勇を揮って残る半生を戦い抜こう」の意ではないかと解釈されている。その想像が的を得ているのかどうかは不明であるが、彼の人となりを探る上で興味深い写真である。



写真14 藤島常興肖像写真
（下関市立長府博物館蔵）



写真15 左の写真の裏書

6 今後の展望（結びに変えて）

以上、藤島常興の足跡とともに、それに関わる資料を紹介してきた。それぞれの資料の所蔵先及び寄託先の一覧は、最後に表でまとめた。本編で取り上げることのできなかった資料は、こちらで確認していただきたい。なお本稿では時間的制約もあって、それぞれの資料の所在や現状の確認を優先したため、個別資料を深く掘り下げた検討は課題として残されたままである。特に文献資料については、その余地が大いに残されている。加えて、まだまだ未発見の資料が多く残されていると思われる。しかし、彼が明治前期の政府による殖産興業政策や、博物学に大きな影響を与えたであろうことは、これまで紹介してきた資料により明らかであろう。また、本稿では十分に検討することはできなかったが、長州閥の伊藤博文や同郷の乃木希典らとの人脈は、彼の実績に大きく影響を及ぼしたと考えられる。このことは藤島常興個人に限ったことではなく、他の長州出身の実業家にも言えることである。明治という新しい時代に、長州閥が国の施策、中でも殖産興業に大きな影響力を持っていたということは、山口県出身の実業家にとって、大きなアドバンテージとなったであろう。

明治時代以降日本の産業の中心にいた人物の中には、長州出身のものが少なくない。彼らは長州閥の政治家や官僚と結託し、近代以降の日本の進路に、少なからず影響を与えることになったはずである。彼らは日本をどのようにしたいと考え、結果として日本はどのようなようになったのか、このことを見つめ直してみる時期に来ているのではないだろうか。そのためには、藤島常興個人と長州閥との結びつきに終始するのではなく、もっと多くの山口県出身の実業家と、長州閥との関係性を検証する必要があると考える。点（個人）と点（個人）との結びつきの研究を重ね、面（集団）と面（集団）との結びつきを解明できたとき、先に掲げた目標の達成に近づくことができるのではないか。そのことによって、これからの日本が進むべき道をも、見えてくるのではないかと考える。藤島常興についてはもちろんのこと、今後も同様の人物について、研究を継続していく予定である。

謝 辞

本稿の執筆にあたって、宮内庁三の丸尚蔵館太田彩氏、国立科学博物館佐々木とき子氏、東京国立博物館高橋裕次氏、京都大学総合博物館山下俊介氏、下関市立美術館関根佳織氏より各施設が所蔵する資料について、貴重な情報をご提供いただいた。また、東京国立博物館の伊藤信二氏・柳世莉氏、下関市立長府博物館の古城春樹氏・田中洋一氏・魚住朗子氏、下関市立豊浦小学校松本秀夫氏、下関市立豊浦小学校教育資料館生駒明氏には、各施設が所蔵する資料についていろいろとご教示いただくとともに、調査にころよくご協力いただいた。さらに山口県立山口博物館の所蔵する資料の調査及びデータ整理については、坂井留美氏にご協力いただいた。ここに感謝の意を表したい。なお、ご協力いただいた成果は、本稿において十分に生かし切れていない点が多い。別稿を期することで、そのご厚意に応えたい。

表3 藤島常興関連資料所在目録

自治体名	所蔵(寄託先)施設名	資料名	内容	
東京都	宮内庁三の丸尚蔵館	日本歴代古金銀貨幣模造鑑	一組(22段に150種319点を収納)	
		日本各邦製古金銀貨幣模造鑑	一組(22段に294種478点を収納)	
	国立科学博物館	日本尺原器		
		メートルと曲尺との比較尺 衡原器(真鍮製旧1貫分銅)		
東京国立博物館	模造貨幣	887点		
京都府	京都大学総合博物館	伏角計		
山口市	山口県立山口図書館	日本古金銀貨大全一目表	藤島常興著	
	山口県立山口博物館	大日本古金銀貨模造鑑など	39箱に360種581点 1922(大正11)年、当時の長府毛利家より寄託	
		安尾家文書「四斤施條砲彈略図」	「心遠斎(藤島常興)写」とあり	
下関市	下関市立長府博物館	四斤施條砲彈略図	「心遠斎(藤島常興)写」とあり	
		四斤施條砲彈	略図をもとに製作したもの	
		馬関戦争絵図	藤島常興作	
		鶴図	藤島常興作	
		鶏図	藤島常興作	
		戯画天狗図	藤島常興作	
		藤島常興肖像画	光永眠雷作	
		藤島常興肖像写真(洋装, 胸より上)		
		藤島常興肖像写真(和装, 胸より上)		
		藤島常興肖像写真(和装, 全身正面)		
		藤島常興肖像写真(和装, 全身後ろ姿)		
		木製菓子器	藤島常興作	
		木製盆	藤島常興作	
		刀装小道具	藤島常興作	
		筭	藤島常興作	
		簪	藤島常興作	
		錠前	藤島常興作	
		絵入り袱紗	藤島常興作	
		藤島家略伝・藤島常興履歴書	藤島常興著	
		藤島家略伝 附常興履歴	藤島常興著	
		日本古金銀表目	藤島常興著	
		日本歴代古金銀貨々名録	藤島常興著	
		ウィーン万国博覧会賞状	測量器械に対し有功賞	
		第一回内国勸業博覧会褒賞薦告	尺度目盛機械及測量器等に対し龍紋賞	
		第一回内国勸業博覧会龍紋褒賞之証状	尺度目盛機械及測量器等に対し龍紋賞	
		第二回内国勸業博覧会証状	諸測量器理学諸器械に対し一等有功賞	
		第二回内国勸業博覧会有功一等賞状		
		第二回内国勸業博覧会証状	経緯儀に対し二等進歩賞	
		第三回内国勸業博覧会褒賞証状	模造旧貨幣に対し二等有功賞	
		「電気燈製造開業」看板		
		藤島常興書簡	許田其峯宛	
		藤島常興書簡	三老台(許田其峯・田上陳鴻・宮本)宛	
		下関市立豊浦小学校 教育資料館	黄金臺模造(茶托)	藤島常興作
			軍資金用黄金大分銅模型	伝藤島常興作
		下関市立美術館	藤島検校(藤島常興の兄)像	狩野芳崖作
		住吉神社	予讓袈衣図(絵馬)	狩野芳崖作

参考文献

天野清「度量衡史話」(1950年)

国立科学博物館「国立科学博物館ニュース 1974 11」(1974年)

関根佳織「続・ほうがい史話 芳崖のお友達③藤島常興」(『潮流』2011年)

田中芳雄・平山成信編「澳国博覧会参同紀要」(1897年)

椿惣一「藤島常興氏を語る(一)～(四)」(新聞記事抜粋 1954年)

(下関市立長府博物館に残されていた新聞記事の切り抜きを参考としたが、現時点で新聞社を特定できず、調査中である。)

中川保雄「藤島常興：封建時代の伝統的職人と明治工業化の結びつき(Ⅰ)」

(『科学史研究』18-131 1979年)

中川保雄「藤島常興：封建時代の伝統的職人と明治工業化の結びつき(Ⅱ)」

(『科学史研究』18-132 1980年)

永平幸雄・川合葉子編『近代日本と物理実験機器』

京都大学所蔵 明治・大正期物理実験機器』(京都大学出版会 2001年)

